

一方、漂海民研究の文脈では課題もあろう。たとえば、先駆的な実地調査として有名な野口 [1987] は、かつて家船生活であった長崎の集落について、過去の生業との連続性を踏まえながら、集落内外の社会関係を実に生き活きと描いている。これに対し本書は社会関係や宗教の描写が少ない。婚姻関係、陸地との接点、ナマコ仲買人とは誰かといった点も不明なままである。こうした側面は、近隣の陸地社会との対照や、他地域の(漂)海民との比較のためにも有意義であるに違いない。なお、今後は海域研究者が本書を評し、より専門的な議論へと展開することを強く期待したい。

漂海民研究の先駆けである羽原 [1963] や上述の野口 [1987] では、既にモーケンへの関心が示されていた。しかし、本邦では、その後、東南アジア島嶼部のサマ研究などが盛んとなるものの、モーケン研究については本書著者の登場を待たなければならなかった。その意味で本書はまさに待望の一冊である。さらに近年、本書著者は「水のゾミア」を論じることで、大陸部山地と海域とを比較する可能性も示唆している [鈴木 2016]。本書の対象とする「島モーケン」の人口はわずか 2,800 人、そのうちタイ国に住まうのはわずか 800 人程とされ、しかも既に漂海生活を送っていない。しかし、このアンダマン海の小さな(漂)海民は、今後、著者の活躍を通して、瀬戸内海から、スルー海、そして、ビルマの山地民までを繋ぎ合わせる、意外にも大きな役割を果たしてくれそうである。

## 引用文献

- 石井米雄監修. 1993. 『タイの事典』同朋舎.  
 ウアイト, W. G. 1943 (1922). 『漂海民族—マウケン族研究』松田銑訳, 鎌倉書房.  
 鈴木佑記. 2011. 『資源化される海—先住民モーケンと特殊海産物をめぐる生態史』上智大学アジア文化研究所.  
 ————. 2016. 「水のゾミア試論—東南アジアの海民を事例として」『東南アジア研究』54(1): 117-126.  
 日本タイ学会編. 2009. 『タイ事典』めこん.  
 野口武徳. 1987. 『漂海民の人類学』弘文堂.  
 羽原又吉. 1963. 『漂海民』岩波書店.

椎野若菜・的場澄人編. 『女も男もフィールドへ』(FENICS 100万人のフィールドワーカーシリーズ12) 古今書院, 2016年, 226 p.

佐々木綾子\*

本書を含む「100万人のフィールドワーカー」全15巻は、「好奇心旺盛なフィールドワーカーたち」が巻ごとのトピックにもとづき、自らの経験をフィールドワークに関心をもつ幅広い層に向け記したシリーズである。

他の巻が「これから調査を始める人」や「災害調査にかかわる人」など、研究者を読者に想定しているのに対し、本書はフィールドワーカーが自分の性(ジェンダー・セクシュアリティ)やライフイベントについてどう迷い、選択し、行動しているのか、ということに焦点をあてた「ロールモデル集」である。

\* 京都大学大学院農学研究科

るため、一般の読者であっても多くの共感や示唆を得られるであろう内容になっている。さらに既刊本の中で群を抜いて女性執筆者の数が多く、本書の特徴である。本編12章のうち10章が女性によって執筆され(1編は夫婦の共著)、うち7章は妊娠・出産にまつわる経験が語られており、女性研究者が中心となったメッセージ性の強い巻となっている。

Part1「フィールドワーカーのジェンダー」では、フィールドワーカー自身とフィールドの人びとの性とジェンダー観が、時として相互に強く影響しあい、フィールドワークそのものに大きくかかわりながら、結果として調査者のフィールドでの振舞いや生き方をも形作っていく経過が語られる。

中川(1章)は、フィールドで積極的に女性たちの作業の輪に加わり「定型化された女性像に吸収され振舞う」ことで、村社会から個人として認められるまでに至った過程を描いている。しかし、そうした意識的・無意識的な振舞いは、彼女自身が逃れようとしてきたジェンダー観の体現でもあったのだ。中川は、自己の常識や信念という「スイッチ」を切り替えることが、対象地域に溶け込む・その土地の規範を(納得できなくても一旦)受け入れるための必要な作業であり、その時々「スイッチ」と対峙することで調査者自身も鍛錬されていくと述べている。2章(永塚)では、状況は異なるが、女性フィールドワーカーであるが故の悩みが語られる。永塚のフィールドは氷河であり、プロジェクトによっては10人ほどのメンバーに限られたス

ペースで長期にわたり共同生活を送る場合もある。着替えや洗濯といった住環境から、「数km先まで白い雪原が広がる」氷河の上でのトイレ、「気合でなんとか乗り切る」生理事情等、「氷雪女子」が直面する課題は少なくない。また過酷なフィールドでは、いくら男性研究者と同じ働きをしようと努力しても、身体差による体力・可動範囲の違いは歴然としている。永塚は、無理をしてかえって周囲に迷惑をかけるより、キャパシティの差を受け止めることも必要だと語る。3章(國弘)、4章(新ヶ江)では「性のフィールドワーク」を行なうフィールドワーカーにとって、自身の性や属性が調査の前提条件となる事例を扱っている。國弘はインドにおける調査で、女性でさらに外国人であるという「好条件」を活かし、去勢儀礼を通過し女神の帰依者となった「ヒジュラ」たちの共同体へ入っていくことができた。ゲイ・コミュニティ研究者の新ヶ江は、調査対象が性文化である以上、調査者の性によってアクセスできる範囲は限定的にならざるを得ないと述べており、逆にそれらが合致した場合は、彼らの置かれている社会・文化的文脈を理解しつつ、声なき声を拾ううえでの強みになるとも考えている。

このようにフィールドワーカーの性は、好むと好まざるとにかかわらず、フィールドで関係する人びとの距離を測る中で常に両者の意識の俎上に乗せられている。その困難さに「女だから/男だから」の差はなく、調査者が対峙し続けることで、自らの生き方を考えることにもつながっていくのだ、というこ

とに気づかされる。

Part2では4人の著者が「子連れフィールドワーク」を行なったきっかけや経緯を語っている。子どもの病気や予防策、授乳方法や食生活等についての詳細な情報が盛り込まれており、研究者でなくとも日本ほど育児環境、特に医療体制が整っていない地域に子どもを連れていく保護者に役立つだろう。また、時に捨て鉢にも思える彼女らの奮闘の背景には、「子連れフィールドワーク」への純粋な好奇心もあるが、仕事との兼ね合いや、フィールドから遠のくことへの焦燥感が大きく横たわっていることにも目を向けたい。各エピソードを単なる個人的な体験談として読むのは容易だが、膨大なエネルギーを費やしてでも「連れて行かざるを得ない」女性研究者たちの事情を理解する足掛かりとしても読み込むことができるだろう。

Part3「ライフイベントとフィールドワーカー」では、研究者が自身や家族のライフサイクルの段階によってフィールドとのかかわり方を変化させながらも「フィールドワーカーであり続けること」を模索する姿が描かれる。長年フィールドに出られなかったり、調査スタイルを変える必要に迫られたりしながらも、それでも著者らは「変化した自分とフィールドとの関係」に新たな可能性を感じ、時には夫婦で、家族で、と単位を変えながら、フィールドワークの新しいかたちを切り開いてゆく。こうした個人の努力が結実する背景には、周囲の理解や意識改革、支援制度等の環境整備が不可欠であり、それらはまだ発展の途上であることも指摘されている。

このように本書は、学問に限らず新しい土地へ踏み出す人に向けた「具体的な経験にもとづくロールモデル」であるだけでなく、さまざまな属性のフィールドワーカー同士の「異文化理解」を助長するうえで大きな役割を果たすであろう。本書の著者たちが読者に想定し、エールを送るのは、しかし、女性だけではない。むしろ本書は男性読者の理解・共感を切望していることが、端々にみとれる。それを端的に示すのがコラム1（長堀）だ。指導者・研究者両者のもつ「無意識の思い込み」によって男女の研究者には“育成され方”に違いが生じ、それらが女性研究者のキャリア開発を阻害していると、長堀は指摘する。本書を読み「私も育児と仕事を“両立しよう””と思う女性や、“やっぱり”女性は大変だ””と思う男性は、女性に偏って育児・家事の負荷がかかることを前提として受け入れ、その現状に自ら欲さずとも乗じてしまっていないか。長堀は、まずは「無意識の思い込みを持っている」ことに気づくことが大事だと訴えている。では具体的にどのような支援・環境作りが必要であるのか？それは本編で著者たちの経験が多くを語っている。彼女ら/彼らの経験から実態に即した制度が整備され、増加する女性研究者のキャリア開発への第一歩となることが期待される。

さて、ここまでではかなり「前向き」な書評を行ってきたが、最後に評者の個人的な感想を述べたい。

正直にいうと、初読の際、評者は本書を文字どおり途中で投げ出している。理由を述べるために個人的な事情を書くことをお許し願

いたい。評者は現在2児（4歳と1歳）を育児中の大学研究員である。2001年からタイ北部を主なフィールドに、農山村の生業や森林利用について研究を行なっている。ただ、現在の立場は「科研研究員」だが、在宅で行なう研究室ウェブサイトの管理と週1日の非常勤講師で、どうにか研究とのつながりを保っている状態である。待機児童150人を抱える大阪某市では時間給研究員など保育園は門前払い。授業の日は市の運営する託児所を利用している（病児保育は利用資格がなく、子どもが体調を崩したら即休講である）。会社勤めの夫は研究に非常に理解があるが、子どもが「おとうさんにあいたい」と泣くほどの激務のため、調査中の留守番はもちろん、託児所へのお迎えですら「物理的に無理」である。それぞれの両親は遠方住まいで、勤めや持病などの事情からおいそれと呼び出すわけにはいかない。ここ数年の評者は「フィールドワークどころかひとりで外出もできないフィールドワーカー」なのである。

フィールド復帰へのヒントを期待して本書を手にとったが、読み進むにつれてさらに暗澹とした気分になった。妊娠中も積極的にフィールドや国際会議に出かけ、「子どもが歩かないうちに」とばかりに猛然とフィールドに振り返り咲く執筆者たち。そして「子連れフィールドワーク」には夫が同伴したり、そもそも夫が同業者である事例の多さにも鼻白んだ。夫が会社員の事例でも「11日間の有給休暇」を取り家族でフィールドに入っているのではないか。世界が違う！つまり本書は「(夫が同業者か、どうにかすれば長期休暇が

取れる職場で、親や同僚など周囲のサポートを受けることができる) 女も男もフィールドへ」であるわけだ、と思えてしまったのだ。だが、目を背けた一番の理由は、いきいきと語る彼女らに「理由を並べて『研究しない』ことを正当化しているだけなのでは？」と、蓋をしていた問いを正面から突き付けられたからだということも十分に理解していた。

かくして一度は仕舞いこまれた本書であるが書評とあっては避けてもいられず、二人目がやや落ち着いてきたこともあり、少々余裕をもって再読に臨んだ。すると、現金なもので、著者である彼女らこそが停滞することへの一番の理解者であることが、一転して読み取れるようになったのだ。一人目出産からメインフィールド再訪まで実に10年を要した四方(9章)の焦燥と逡巡の記録は、まさに評者のような読者に向けた心強いメッセージであろう。三谷(12章)の、「子持ちの」「女性」研究者にとって一番必要な条件はフィールドワーカーでいたいという「自分の意思」だが、個人の「意思」と周囲(特に男性研究者)の理解や支援の制度といった「環境」とは複雑に絡み合っており切り離せるものではない、という主張には、研究者に限らず仕事を継続する困難さに直面している女性ならば深くうなずくところだろう。椎野(6章)も同様の指摘をしたうえで「物理的、あるいは難しいときには精神的にでも『継続する』のがフィールドワーカーなのだ」といい切るのは、後に続く女性たちへのエールであると同時に、子育て・介護にあたりながら仕事の責任も抱える彼女自身の決意表明ととも

れる。

女性フィールドワーカーは、男性より相対的に多くの役割を担い、それぞれの事情を踏み越えフィールドに立っている。本書は子育てに焦点をあてたが、不妊治療や介護といったライフイベントに臨む研究者も、今後確実に増えるだろう。特に不妊治療は主に女性に多大な身体的・精神的負担がかかるうえに、そもそもゴールがあるのかも見通せず、さらに治療の個人差が大きく、非常にプライベートな内容を含むため周囲の共感を得づらいという事情もある。「続けたかったら続ければいい」「子どもを産んだから（治療中だから・介護だから）しょうがない」という一見「寛容な理解」は、女性研究者の選択肢を増やすための思考を放棄しており、結果として生き残る女性研究者は「なりふり構わぬ個性的な人」という偏ったレッテルから抜け出すことができない。さまざまな立場の「生きやすさ」を具体例から考え、徐々に組織・社会を変えていくためにも、本書から学ぶことは多い。

椎野若菜・的場澄人編。『女も男もフィールドへ』(FENICS 100万人のフィールドワーカーシリーズ12) 古今書院, 2016年, 226 p.

木村大治\*

本書は「100万人のフィールドワーカーシリーズ」の1冊として刊行されたものである。表題のとおり、フィールドワークにおけ

るジェンダーの問題、とくに女性のライフコースとフィールドワークについての論者がその中心となっているが、そのほかに、セクシュアリティを調査対象とする研究として、インドの「ヒジュラ」と呼ばれる去勢した人々、およびゲイの人々を扱った2編の論考も含まれている。

一読しての感想は、たいへん面白い、しかしたいへん重い本だ、というものであった。女性研究者たちがさまざまな困難に出会うフィールドに突き進んでいく姿は、凡庸なエスノグラフィーよりも鮮やかにジェンダーの問題を活写している。一方、その過程で出会う女性研究者としての苦労については、いくつかの話は私が個人的に知っていることもあり、平常な気持ちで読み進めることが難しい部分もあった。

本書の表題は『男も女もフィールドへ』ではなく、『女もフィールドへ』でもなく、『女も男もフィールドへ』である。まさにこの点に、ジェンダーや排除をめぐる問題の微妙さが集約されているように思われる。本書の著者たちは、女性12人、男性3人と、大きく偏っている。これは無論、さまざまなハンディを背負うことが多い女性にとってのフィールドワークの可能性を考えようという、本書の目的からのことだろう。しかしおそらく『女も男も』という表題は、そこだけに留まっていけないという方向性をも示唆しているのである。私自身は、研究とともに育児にも携わってきたという経験をもつが、評者の選択において考慮されただろう、そういった事情の記述も交えつつ、若干の議

\* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科